

米欧亜回覧

第36号

発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集 総務部会

特定非営利活動法人(NPO法人)

「米欧亜回覧の会」正式に発足!

「米欧回覧の会」は、二〇〇四年八月二十五日をもって、特定非営利活動法人「米欧亜回覧の会」として正式に発足することになった。任意団体から法人化した主眼は、従来のサロンの集まりから社会的に役立つ団体への展開であり、それはこれまで蓄積してきた「岩倉使節団」と「米欧回覧実記」に関する知識や情報、そしてそれを起點として考察してきた日本近代史に関する知識や未来への

展望・ビジョンを、さらに深めて外へ向けて発信し社会的に生かす方向へ踏み出すことを狙いとする。とくに近代日本に関する歴史認識が稀薄だとされる若い世代への働きかけは現下の重要課題であり、すでに当会では「米欧回覧実記」の現代語訳の出版やビデオ映像の活用など各種の具体的な取り組みを始めている。内向きの勉強会から外向きの社会教育集団へ、この際、会員のみなさんの意識も新たにしていきたいところである。



7月全体例会(国際文化会館)

全体例会は十月三十日(土) 保阪正康氏を招いて

本年は「日本近代史」をテーマに、一〜三月まで中村政則氏に三回連続セミナーを、七月には岡崎久彦氏を招いて外交史からみた日本の近代を、そして今回は昭和史の生き証人三千人にインタビューして多数の

(関連記事四頁)

貴重な著作がある保阪正康氏に講演をうかがうことになった。講演後の二次会にも講師は出席くださることになっており、突っ込んだ意見交換が期待される。(関連記事 五頁)

二〇〇五年新年懇親例会はオーストリアをテーマに

新年懇親例会は、毎年、岩倉使節団が訪問した国々をテーマに行っており、本年は国交百四十周年を記念してスイスをテーマに行われたが、二〇〇五年はオーストリアをテーマにするのが決まった。さて、趣向はどうなるだろうか、おそらく華麗なるハプスブルク王朝の都、ウィーンにふさわしい新年会が企画されるものと期待したい。

十周年記念行事は二〇〇六年に

設立十周年記念行事はこれまで、二〇〇五年十一月にグラドシンプोजウムを開催することで合意されていたが、その後の準備状況や諸般の情勢判断から、その開催時期を一年延ばし、前回の満五周年記念から五年後の二〇〇六年の秋に「満十周年記念事業」として開催することになった。じっくり時間をかけて準備しようという趣旨で、近く「記念事業プロジェクトチーム」を組織して準備にとりかかることになる。

かつてケネディは「国家が何を与えてくれるかでなく、我々が国家に対し何が出来るかを考えるべきだ」という意味のことをいった。

暖衣飽食の中で自分を見失い、何のために生きるのか、何に生き甲斐を見いだしているのか、わからない若者が増えている。若者だけではな

われわれに出来ることは何か

泉 三郎

が、現実には人はそれで満足できていない、もの足りなさを感

化は、それを明確化させ、具体化して「こう」という意志の表れといえる。そこで自問しなくてはならない。われわれに出来ることは何か。当会の財産は何か。「岩倉使節団」に関する資料?、「米欧回覧実記」に関する研究?、日本の近代史の研究成果?、関連のスライド、ビデオ? あるいは未来についてのビジョン? それもある、しかし、当会の第一の資産は会員自身であり、多彩なキャリアと才能をもつ人材群である。この人材の持つ力を結集すれば何か役に立つことができないはずはない。あるいはそれは、これからの世代に歴史感覚、日本の近代史をしっかりと伝えていくことであるかも知れない。あるいは、生き甲斐、使命感、志をも持つってもらうことも出来ない。法人化を機に、会員一人一人がそうした意識を持って、社会に対し、日本に対し、米欧亜の世界に対し、小さくとも、その役立つ一歩を踏み出したものである。

第34回 全体例会

偏向史観の「めがね」をはずして、
見えてくる「日本の近代史」

岡崎久彦氏の講演

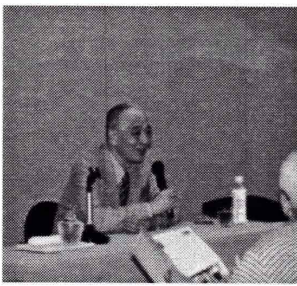
七月三日(土) 十三時、国際文化会館講堂にて全体例会が開催された。第一部は、各報告の後、泉代表から、幹事会などの議論を基にした十周年記念事業についての提言があった。

一、「米欧回覧実記」現代語訳および関連する出版

水澤周氏が早春に訳出を終えたが、ある篤志家が賛助金を出してくれることになり、既に、慶応大学出版会が編集にとりかかっている。来年三月か四月頃には五冊揃って本に見通しである。また、注やインデックスなど、実記を読む会や英訳実記を読む会で重ねてきた議論、ノートやデータなどをまとめて出版できれば更にいいと考えている。

二、ビデオ映像の活用

当会発足の一つの動機は、



岡崎久彦氏

「実記」および使節団岩倉団を広く一般に知らせることであり、スライド映像を作った。現在は九十分のビデオができています。その活用法の一つは市販することであるが、そのためには版權の問題解決やビデオ版に合わせたシナリオ、ナレーションの作り直しなど多大な作業と費用を必要とする。そこで当面は、会員による映写会やNHKに番組制作などに働きかける素材として活用することにした。

三、グラント・シンポジウム

使節団に関するシンポジウムとしては、「実記」に関する研究と使節団そのものの歴史的背景に関するものがある。特に人物を中心にした研究が意外に少なく、当会に相応しいテーマであると考えられる。

具体的には、使節団の首脳人物を通してどういう意味があったかを検証すること、歴史部会の連続セミナーなどの延長にある百三十年の日本近代史の光と影を総括すること、そして現未来部会がやってきたことをベースにしたこれからの日本はどうなるか・どうするかを論じるなどの案がでてくる。これらの三本立てでシンポ

ジウムをすすめることが、使節団が壮大なグラント・ツアーであったことに因んだ「グラント」の意味である。それぞれについての意見交換が行われたあと、十三時から、歴史部会の永富邦雄氏が講師の岡崎久彦氏を紹介し、第二部の講演に移った。

講演要旨

岡崎久彦氏は駐サウジアラビア、タイ大使などを歴任、本省では情報畑の専門家としてキャリアを積んでこられた外交官であり、同時に「陸奥宗光とその時代」、「小村寿太郎とその時代」などの五巻本をはじめ、歴史上の重要人物を通じて「近代日本の外交史」を描いてこられた政治史家でもある。今回は限られた時間内にもかかわらず、その蘊蓄を傾けて大きな二つのテーマ、「現下の国際情勢」と「日本の近代史」について貴重な講演をいただいた。紙幅の関係で「現下の国際情勢」は割愛せざるをえないが、ここでは「日本の近代史」についてその要旨を紹介する。

■日本近代史をどうみるか

私は七年前かけて、近代史を書いてきた。それが「陸奥宗光とその時代」から「吉田茂とその時代」までの五巻本になり、その要約として「百年の遺産」を書いた。

学者でない私が日本の近代史について通史を書くなんてことはまことにおこがましい話だから、歴史的に重要な人物(外交官)の事績を通じてそれに迫ろうとした。本来なら通史は権威ある大学者が書けばいいのだが、このところの学界の傾向は、専門分野が細かくなつて重箱の隅を楊枝でほじくるようなことばかりやっている。中央公論などの「日本の歴史」でもそれぞれの専門家が各章ごとに書く、要するに寄せ集めになってしまっている。それでは通史としての意味がない。

そこで私は、外交史の側面からアプローチし、歴史的事実に即してその実態に迫ろうと努めてきた。が、その過程でわかってきたことは、これまでの歴史がいかに偏向しているかということだった。それはある種の偏向史観、イデオロギー、思想論理、たとえば反体制論理というのがある、その思想で一貫させようとするからだ。そのため、事実としての歴史が書けなくなる、どうしても偏向史観になってしまう。それが歴史学者の通弊であり、大きな問題だと思ふ。

読んでみるとどの歴史書でも、扱った歴史的事実についてはそう間違っていない。たとえ左翼のものでも取り上げる史実に誰もそう誤りはないように思ふ。ただ、問題はその歴史の上における大小軽重のバラ

ス感覚にある、何が大事で何が小事か、それがみえてない。何が主流か、何が傍流的かの判断がおかしい。だから部分的には正しいが、全体的には間違っているという印象が強い。

私の手法は自分なりに一章ごとに書き上げて、それを信頼のおける学者数名に叩いてもらい批判してもらおう。その上でもう一度書き直すという作業をしてきた。その結果できたのが五巻本である。そこでわかったことを一言でいえば、これまでの歴史がいかに偏向史観に毒されていたかということだ。その主たるものをあげればこうなる。

◆薩長史観

これは維新までの徳川幕府の治世が非常に悪いものだという史観である。いわば勝者の論理で、敗者を悪者にする、江戸時代は暗黒の時代で、明治になってすべて明るく、よくなったという。これが大きな間違いで、歴史には継続性があり、江戸時代の遺産があり、その土台の上に明治維新があると考えるべきだ。この史観の問題はその認識が欠落してしまつたことである。

◆皇国史観

これは日本が皇国であり、神の国であり、その神国思想で凝り固まってしまったことである。天皇を神聖として、唯我独尊的な思想で、一貫しようとする、だから世界の現実を無視



岡崎氏の講演を熱心に聞く満席の参加者

し、一方づいてしまふ、ここに大きな間違いが起きる。

◆占領史観
これは薩長史観と似ている。戦前はすべて悪で、帝国主義、侵略主義、軍国主義、すべて悪ということになる。それがマツカリーサーによってその悪から解放され、民主主義と自由と豊かさがやってくるという説。だが、実際には戦前からの継続性があって善がすべてマツカリーサーのせいではない。日本には戦前すでにそれを可能にする蓄積があり遺産があった。戦前の日本にデモクラシーも自由もなかったかのようにいうのは、とんでもない間違いである。この占領史観、言い換えれば東京裁判史観をおかしなことで左翼が「護憲」などと称してしきりに支持する。

◆自虐史観
これは八十年代になって出て来るのだが、中国や韓国にむかって過去の日本の非を暴き

立て「怒れ、怒れ」という、そしてしきりに自国の反省をやる、これがまた大小軽重の感覚に欠けていること甚だしい。

◆司馬史観

それ司馬史観というのがある。司馬の小説は占領史観で自信を失った日本日本人に希望を与え自信を取り戻させた。その意味で新鮮であり大いに意味があった。ところが、司馬は「明治まではよかった、日露戦争まではよかったが、そのあとが悪い」という。単純に「明治はよかったが、昭和は悪かった」という。ところが大正時代にもいい時代があり、デモクラシーも日本に育っている。その視点が司馬には欠けている。

司馬史観でいくと、明治の人間は立派で、昭和の指導者は馬鹿扱いになりかねない。が、私の考えでは、たとえば日露戦争時の桂と太平洋戦争時の東条それに東郷平八郎と山本五十六、それから大山巖と今村均を比べてみて、どちらがどうかといえれば、むしろ昭和の人物の方が優れているように思うくらいだ。桂は人はいいが信用が足りないし、東郷も戦争指導者としてどうか、小村も単純でイケイケドンドンの男で、むしろ戦後の重光のほうがバランス感覚が優れている。大山と今村はあるいは同じくらい偉かったかも知れないが・・・

さて、こうして偏向史観のめがねをはずして歴史を通観すると、そこから見えてくるものも少なくとも三つある。

第一は、江戸時代と明治の連続である。江戸時代の遺産がいかにすごかったかという、それは人物にある、つまり文治主義の成果だと思ふ。そこで私も明治を書きこくときに、江戸時代から書き起している。それはその遺産、文化遺産が次世代に連続と生きていることをいいたいかからだ。

かつて安岡正篤氏はいった、歴史で一番面白いのは三国志の時代と明治維新の時代だ。それは何故か、中国では後漢の二百五十年、日本では江戸時代の二百五十年、それが世界にも稀な文治政治時代であって、そこで育った人物が激動に変化する時代にどう対応していったかということであり、そこに幾多の人物が輩出してドラマをくりひろげていく面白さがあるからだろう。それはつまり教養主義の成果なんだと思ふ。とにかく彼らはよく勉強した。新井白石、荻生徂徠だって、一介の書生だったものがただ勉強の成果で、一国の首相格にまでの上があるのだ。つまりそうした江戸時代の文化遺産、人物を育む土壌があったこと、それが明治をつくる土台になっている。ということが明らかにする。

第二には、大正デモクラシーの評価である。大正時代、自由、デモクラシーは日本にかなり育っていた。女性解放、農地解放などでさえ、明治憲法の中に芽があり大正にはぐくまれる。それまでもなく戦後の進駐軍やマツカリーサーがいきなり与えたものではない。言論の自由もあつた。明治憲法は人権宣言の憲法です、それがわかるためには大正デモクラシーを評価し、理解しなくては行けない。

その大正デモクラシーがおかしくなるのは、政党の党利党略、利権の横行、政治腐敗、貧富の差の拡大などが蔓延し、また一方で英米崇拜主義がはびこり、世相は墮落しエログロナンセンスに陥る。それにあきたらない世論が、清廉で正義をイメージさせる軍人に期待し、強力な政治を欲したのだ。

大正デモクラシーは自由民権運動の営々たる努力の成果だった。原敬内閣から護憲内閣までデモクラシーは育つかにみえた。しかし、デモクラシーに通弊の欠陥が露呈して、世論はむしろ軍人支配や独裁的政治をかえって求めることになった。

思うに民主主義は根付くのに時間がかかる。英仏の歴史をみても何度か揺り戻しがきている。チャーチルの言は正しいと思う、「民主主義はどうしようもない、うんざりするよいうなシステムだ、しかし、他のどの政治制度よりもましだ」と。しかし、それがわかるには一度

は失敗してみないとわからない。日本にもそのゆり戻しが来て、絶対主義、専制主義に傾いた。軍人は凛々しく頼もしく見えた。つまり軍人支配に救いを求め、国民が期待したのだと思ふ。

第三は、太平洋戦争の評価のことである。非は日本にあるというこ面ばかりいつている論者がいるがそうじゃない。英米の圧力、戦争を挑発する要因がこちら側にあつた。シナ事変などはまさに中国が挑発した、日本はぬきさしならないところまで追いつめられた。

太平洋戦争で何が一番悪かったのかといえれば、それは真珠湾攻撃だったと思う。あれで日本は裏切り者になつてしまった。日清、日露の戦争では国際法を遵守してルールにのって戦争した。だから、日本人はそれまで尊敬されていた、ジャパニーズジェントルマンとして評価されていた。

ところがだまし討ちをしたということの評価が豹変し信用を失ってしまった。もう少し紳士的にやっていたら、国際世論も味方につけられたのではないか。

以上、大きな問題を非常に簡潔に要領よくお話しさし、会場での質問にもお答えいただいた。こころより御礼を申し上げます。

(文責) 泉三郎

NPO法人

特定非営利活動法人

認可手続きの経緯と確認

本会の特定非営利活動法人(NPO法人、以下同じ)化については、前号会報にて、去る四月十二日、都庁へ法人設立承認申請書を提出、受理されたことまでお知らせしていたが、その後書類審査、縦覧、公告等の手続きを経て、八月十一日付で認証決定の通知を受けた。これにより、八月二十五日東京法務局八王子支局に法人設立登記を行い、本会はいよいよ正式にNPO法人として発足することとなった(法人設立は八月二十五日付、八月三十一日、登記簿謄本受領確認)。この後、九月一日都庁へ設立登記完了届出書等を提出、さらに九月十三日までに国税、都税、市税、各税務事務所へ事業開始等の申告を行い一連の手続きを終了した。

次に、新しく発足したNPO法人の概要を、定款にそって簡単に紹介しよう。

一・目的(三条)

この法人は、「岩倉使節団」とその記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々を中心に、この素材を源流として「世界」を知り、「日本の近代史」を学び、「温故知新」の精神を以って、現代日本の直面する諸

問題についても率直に意見の交換を行い、併せてその成果を広く一般市民、特に若い世代に伝え、それによって「よりよい日本」、「よりよい世界」のために、いささかでも寄与・貢献することを目的とする。(全文)

二・特定非営利活動の種類

活動の種類としては次の三項をあげている。

(四) 活動

(一) 社会教育の推進を図る活動
(二) 学術、文化の振興を図る活動
(三) 国際協力の活動

三・事業の種類(五条)

事業の種類としては、講演会、シンポジウム、映像の会などの開催、セミナー、講師派遣の企画・実施、国内外での各種ツアーの企画・実施、ビデオ等映像制作、書籍・資料などの出版、会報の発行、他団体とのネットワーク構築などをあげている。

四・会員および役員

(六) 会員(十九)条

会員および役員に関する規定は従来と基本的には変わらない。「代表」は「理事長」となる。役員の任期は一年。

五・会議(二十)条(三十七)条

会議としては「総会」および「理事会」がある。総会は正会員をもって構成され、年一回開催される。理事会は随時開催される。

定款には、以上のほか資産、会計、定款の変更、解散および合併、公告の方法、事務局、雑則等の条文があるが、全体で五十八条、十二頁に及ぶ長文であり、一覽になりたい方は事務局まで連絡ください。

さて、本会の法人化に伴う当面の課題としては次のようなことが考えられる。

- ① 総務、会計を中心に事務局の整備充実を図ること。
- ② 会の紹介パンフレットを作成すること。(正式、簡略の二種および英文版)
- ③ オフィスを設置すること。
- ④ 会のツールとして名刺、封筒、ロゴマークなどを作成すること。
- ⑤ コミュニケーションを深めるためインターネットを活用すること。
- ⑥ 収益事業として出版事業を企画すること。(実記の現代語訳出版など)
- ⑦ 会員の増加(特に若い年齢層の会員増)を図るため、具体的な実施策を検討すること。
- ⑧ 認定NPO法人制度の導入を検討すること。(これにより税法上、寄付が受けやすくなる。

なる。但し、認可を受けられるようになるまで一年以上の実績が必要

いづれの課題も会組織の整備強化、会活動の一層の充実、そのための企画力涵養などと係わる事柄であり、会員全員で一致協力して取り組んでゆかねばならないことである。皆様方の積極的な会活動への発言、参画をお願いしたい。

(文責) 山田 哲司

ビデオの活用

提案続出!

先の幹事会では、ビデオの活用について意見交換が行われ、いろいろの提案がなされた。一つは次世代へ向けての働きか

けで、小学生、中学生、高校生にみせること、そのためにその教職員に働きかけること、また国際交流団体や青年海外協力隊やJICA(国際協力機構)との研修機関に働きかけること、あるいは各地域のコミュニティセンターや社会教育・生涯教育機関に働きかけることなど。また、小さな同窓会や同好会などでも会員がビデオを持参して上映することがあってもいいなど、数々の提案がなされた。

ビデオの貸し出しについては、これまでにもいくつかの要望が出ていたが、版權、ダビング、散逸などの問題もあり、基本的には貸出しはしないこととして今日に至っている。しかし、NPO化したにもかかわらず、このような要望に対応できないのはいささか残念に思っていたところ、今般、福島県西郷村立米(よね)小学校より小学校六年生の社会科の授業で、「岩倉使節団」を取り上げるので、ビデオなどの資料の貸出しの要請があった。

幹事(映像部会)の足立氏が現地に出張して担当の先生にビデオを見せ協議したところ、小学生にはこのビデオではやや難しいとのこと、改めて資料ビデオを当方で作ることにした。この事例が示すとおり、相手によりさまざまに対応が考えられることでもあり、会員各位それぞれに活用先の開発、本会の広報に努めていただきたいと思う。なお、当面の運用としては、貸出しはせず、会員がビデオを携行し、講演又は説明する形式にする、遠方の場合には旅費先方持ち(上記のケースでは例外的に旅費当方持ち)、などを原則にしたい。



ビデオ版全3巻のチラシ

十月三十日(土)

全体例会の保阪講演に大きな期待

次回、全体例会で昭和史研究の第一人者保阪正康氏が日中関係から見た昭和史を語る。今や日中は経済上は運命共同体であるのに外交関係は膠着状態が続いています。北京の日中対抗サッカーでの日本へのブーイングは記憶に新しいところである。

保阪氏の力作『後藤田正晴』(文春文庫・二九九九年)、『昭和陸軍の研究(上・下)』(朝日新聞社・一九九九年)の中国語訳が出版された。後藤田論

は新華社による全訳、昭和陸軍論は部分訳である。原本はもちろん日本語だが、それが中国の社会科学者や知識人から熱い視線を浴びた。中国の研究者と親しい保阪氏は、中国の近代史研究の視点が「イデオロギーからリアリズムへ」急展開しているという。

私自身、最近、氏の中国論を聞いたが、日中間に横たわる重い問題を鮮やかに提示しているのに圧倒された。問題の解決は容易ではないが、それなしに

は日本の展望も開けないほどの大きなテーマだと感じた。保阪氏には一九九九年七月に当会の例会に登場して頂いている。その時の講演『昭和史に学ぶ「大東亜戦争」への道』も大変好評であった。今回はお忙しいなか講演後の懇談会にもご出席いただけるとのことである。

多数の皆様のご来場をお待ちする。なお、検索エンジンで「保阪正康」のホームページにアクセスできる。また、全体例会での保阪講演要旨は、当会ホームページに掲載する予定である。(文責) 半澤 健市

合同書評会の提案

泉三郎 著(文春新書)

「岩倉使節団という冒険」 泉氏の新著『岩倉使節団という冒険』が七月に上梓された。本会の会員各位はすでに承知であり、読まれた方も多いことであろうが、敢えて紹介することとした。

『米欧回覧実記』は、われわれ会員にとって、いわばバイブルであり、誰でも通読した経験をするが、一方では読みにくく、また大部でもあり、一般の方々には、とつきにくい書物であろう。本書は、『実記』の骨格部分を、あたかも映像の会で開かれた、例の「泉節」調で、さらりと記された、またとない格好の入門書となつていく。

しかし入門書ではありながら、本書は同時に日本の近代史における岩倉使節団のもつ歴史の意味について正面から取り組んでいる。題名にもあるように、著者はこの使節団を「冒険」として捉え、廃藩置県の直後に政権中枢の過半ともいえるべき重要メンバーが長途の旅に出かけてしまうという常識では考えられないような「冒険」について、何故敢行されたのか、留守政府との確執は如何に、旅の土産は々と、それぞれに簡潔明快な解釈を提示して



いる。この「冒険」はまさに日本近代化の源流をますグラランドツアーであり、本会のいわば原点でもある。今、『実記』から何を讀みとればよいか、著者はこの「思い」をエピソードの最後の数行で、「今、日本人に不足しているのは、世界的視野と歴史的認識の中で、過大でも過小でもない等身大の日本の真の姿を見直すことであり、自らへの信頼と歴史への誇りを取り戻すことではないのか」と締めくくっている。

本会にとつての本書の出版は、改めて原点にたち返り議論をする絶好の機会である。著者の「思い」は議論のあるところであろう。それ故にこそ、本書を題材に日本の近代史における岩倉使節団の意味を問う直すことは極めて重要であり、興味深いことと思われる。いずれにして本書は会員のテキストとして格好の書物であり、会員相互が通読の上これをたたきだいにして合評会のようなものをすれば、さらに理解が深まり問題点が明らかになると思う。合評会の開催を提案する所以である。

(S・Y)

久米美術館・特別展案内 10月31日まで開催!

銅鑄にみる文明のフォルム 『米欧回覧実記』挿絵銅版画とその時代展

久米美術館では、『実記』の挿絵銅版画を制作の観点から紹介する特別展が開催中である。展示内容は、日本における銅版画の歴史を顧みながら、『実記』銅版画の制作者までの系譜をたどるものである。江戸時代から始まった腐蝕銅版画の歴史における日本的銅版の精華の一つとして『実記』挿絵銅版画の位置をさまざまな作品や資料によって具体的に示し、『実記』と前後して刊行された異文化紹介の出版物の挿絵を比較研究



特別展パンフレット表紙

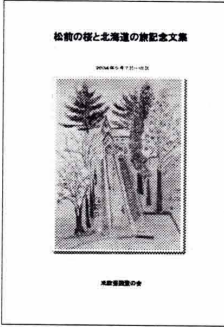
久米美術館(東京都品川区上大崎二・二十五)は、JR目黒駅西口から徒歩二分。開館は十時十七時(入館は十六時三十分まで)、毎週水曜日休館、料金は一般七百円、大高生五百円、中小生四百円。

歴史ツアーと 記念文集「松前の櫻と北海道の旅」 について



「米欧亜回覧の会」では、設立以来これまで各種の「歴史ツアー」を毎年、国内や海外におたつて行ってきた。その歩みは次の通りである。

- 海外ツアー
 - ・〔岩倉使節の足跡を訪ねる旅〕
 - ・ドイツ (二〇〇〇、八・二二 七・九・二二)
 - ・英国 (二〇〇一、九・六・十 三)
 - ・イタリア (二〇〇二、十・五 三・十四)
- 国内ツアー
 - ・ヨコハマ・ツアー (二泊) 一 九九七、八・三三・三十一 開 港資料館、金沢八景、夏島、 江戸博と隅田川(屋形船) 一 九九九、十・三三、日米交流 のあけぼの展ほか
 - ・那須方原ツアー (二泊) 二〇 〇一、五・二二・二二 明治 元勳の屋敷と青木周蔵邸、 大磯ツアー 二〇〇二、六・



松前の櫻と北海道の歴史記念文集



松前神社

二十九 吉田茂邸 (七賢堂) と踏鞴閣

- ・佐倉ツアー 二〇〇三、五・ 十七 国立歴史民俗博物館、 順天堂、堀田邸
- ・京・大阪ツアー (二泊) 二〇 〇三、十一・十八・十九 大阪 城、旧岩倉邸、京都御所

これらの旅については、ニュースにその都度、報告記事が掲載されている。しかし、これまで、「旅の文集」なるものを作成・刊行したことはない。このたびは、はからずも有志より「文集」をつくらうという声があがったのは、今回の旅が国内ツアーとしては三泊四日にとつたるものであったことや、二十数名という多彩な参加者を得て極めて実り多い旅になったことが背景にあった。

とりわけ松前の櫻のインパクトは鮮烈であり、また各地での旅の印象や多士済々の複眼で見た旅の感想をこのまま忘却の彼方におしやうしてしまうのはいかにも惜しいという思いがあった。この旅がどんな旅であったかは、この文集を一覧して下さればわかるだろう。まさにそれは天・地・人の恩恵の賜であり、

当会ならではの、よきお仲間のお陰であったことを痛感する。この文集の編集・制作は水澤周さんと永島千代子さんが担当してください。A四版五十六ページ、カラー写真、スケッチ入りで、一部千円(送料別)で頒布している。希望者は事務局または永島千代子さんに申しこんでください。

二〇〇五年春

歴史ツアーは「長州の旅」

幕末、反幕府勢力の急先鋒となり、最も過激な革命勢力でありかつ英国に留学生を派遣するなど最先進藩だった長州、幾多の人材を犠牲にしたがらなお多くの人材を輩出し、明治政府の原動力となった長州を訪れる企画がすでに関係者の間で進められている。候補地は萩、下関、山口などで、四月下旬の二泊三日の旅になりそうである。乞う、ご期待!



萩市 (萩市役所ホームページより)

実記を読む会報告

連絡 クラウンインターチェンジ

Tel 03-5469-2090 Fax 03-5469-2093

info@crown-interchange.com



「実記を読む会」では今年から分担して英国編の現代語訳に取り組んできたが、訳のみでは単調になりがちだったため五月に皆で話し合い、発表する人は一工夫するこ

第七十五回例会

六月三日、第二十六巻 リパプールの記上下を読む。始めに石川氏より英国船会社の沿革、蒸気機関の発明と実用化、航海技術の進歩など十九世紀における英国海運の驚異的發展についての解説があった。水門担当は橋本氏。ロンドンもリパプールもなぜ水門のドックなのか。それは河の港で潮の満ち引きによる水深の影響を受けないための工夫であったことを説明された。穀物蓄積のところは、岡村氏が一字下げて書かれていた久米の穀倉見学の感想を子供に読み聞かせる調子で読まれた。日本では米中心だが、久米は麦を栽培して輸出したらよ

いと提案している。クレイン担当の浅生氏は膨大な資料を使って、東西と日本の移動式クレインの歴史をとうとうと述べ喝采を浴びた。

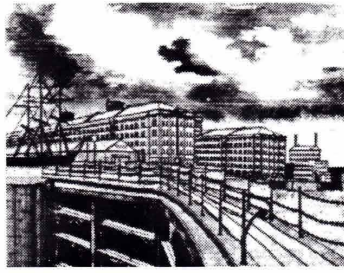
第七十六回例会

七月八日、第二十七巻 リパプールの記下を読む。藤原氏は造船分科の説を担当。氏は床に大きな船の設計図を広げて船体構造について説明された。続いて「海軍の誕生と現代日本」：幕末期海軍建設の再検討と「海軍革命」の仮説：(バク・ヨンジュン著)、元綱数道氏による記事「激動駆けた幕末の蒸気船」を披露された。

次に水澤氏より鉄の船と汽船について(服部之総「黒船前後」より)の資料が配られ解説があった。鉄といえば室賀氏。氏は膨大な資料とホワイトボードを持参、絵図を交えて当時および現在のレール、車輪の製造方法、規格、品質等について、さらに熱鉄、製鋼について熱弁をふるわれた。

第七十七回例会

九月九日、第二十八巻マンチェスターの記を読む。ガラス製造の始めの部分永島氏が担当。氏はガラスの材料、板ガラス、フロート法について述べられた。ガラス製造の続きを川島氏が密度の濃い資料を用いて解説、久米の表記の



リヴァプール・水門及び穀物倉
(『実記』)

不明快な個所を久米邦武文書および実記の英訳等を参照して指摘された。鏡の製造は磯野が担当、現在完全に自動化されている鏡の製造工程を資料で確認した後、実記の製造工程の箇所を音読。現代の鏡も原理はこの時のものと変わっていないことを認識した。棉花紡糸場担当の三原さんは織維博物館を訪ね予備知識を習得しての発表、綿花から一本の細い糸にするまでの工程をサンプルを示しながら解説された。

イギリス編は当然のことながら産業見学の記述が多いが、久米は実によく観察して理解し、記録していることに改めて驚かされる。

「読む会」は、原則として毎月第一木曜日に開催しています。少しでも興味のある方は気楽に覗きにいらしてください。

(文) 磯野成子

英訳実記を読む会報告

連絡 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

zaa96087@oak.zero.ad.jp



毎回十名前後の参加で、スローアンドステディに読み進んでいる。十六章も終りに近づき、第一巻も四章を余すだけになった。七月十五日は三原氏、小林氏によるナイアガラ見物、柴田氏によるサラトガスプリング訪問、夏休みをはさみ九月十六日には浅生氏がサラトガからボストンに至る旅、また大森氏が「太平楽会」を中心にボストンの訪問の項を朗読・報告した。相変わらず多い誤訳を見つけて楽しんだり、原書にない勝手な表現に腹を立てたり、地図やインターネットで収集した現地情報で記述の正確さを検証したりと、予定時間を越えホットな議論が続いた。「太平楽会」ではその規模と大砲まで持ち出す演奏の仕掛けに改めて驚く。一方、演奏やソプラノについて漢語を使った久米の感想描写は面白い。しかし表現は観念的な古典引用の譬えが多く、そのまま直訳されていて意味が通じないと思われるところもある。英訳版で新たに付け加えられた注は、カタカナ語の同

現未来部会報告

連絡 塚本弘

Tel 03-3211-2765 Fax 03-3213-1371



tn@ne.jp

定や新事実の説明補足があり参考になる。毎回担当メンバーから配布される日本語訳を、散逸しないように取りまとめることにした。再来年の十周年記念「グラランド・シンポジウム」で何らかの形で発表出来ればよいと考える。

(文) 小林養丈

■例会報告
国際文化会館に十六名が参加。開催日は七月七日(水)。テーマは「新薬開発における日米比較論からみた臨床試験と特許問題」アルファロール、オキサロール研究開発経験者の疑問―、報告者は中外製薬の研究開発の領域を長年歩んできた西井易穂氏(会員)である。

まず司会者が、五月の道南ツアーに参加された西井氏の三分スピーチが今回の例会につながったと経緯を紹介。引き続き、西井氏が大型新薬であるアルファロールの開発過程で国際競争に巻き込まれた経験に基づき、医薬品の開発における特許とはどのような位置づけにあるのかを整理・解

説したA四・十枚におよぶ詳細なレジュメに沿って以下のような報告をされた。

医薬品業界では、発売までに長期間にわたって多数の組織、研究者が関与し、発売するときには製品開発初期の特許は意味をなさない状況であった。それが、二〇〇一年八月にカリフォルニア大学の中村教授が青色LEDを開発した時点の日亜化学工業に対して特許権の「正当な報酬」を要求し、二〇〇四年に裁判所の判決を下したという経緯が新聞でも取り上げられ、企業界の研究者たりといえどもその特許料を還元してもらおう意味が十分あり、特に大成功した発明、大発見についての意識が社会的に変わってきた。

これらの特許訴訟の動向についての企業における個人の貢献度に関する経験に基づいた違和感や、医薬の世界で国際常識になつていくアメリカのFDA(食品医薬局)の責任を論理的に指摘。その上で、薬の開発には対して永続的な責任が必要であり、人の和が大事であると結論づけた。

講演を受けて、多くの参加者から熱心な質問が続き、予定時間を二十分過ぎて閉会となった。(議事録より作成)

関西支部報告

連絡 山崎岳磨

Tel&Fax 06-6853-3137

takechan@tcct.zaq.ne.jp



■例会報告
七月十六日(金)、十五名が参加。前回の続きとなる総説より始めた。プリントを使用し、山脈、河川について話題にする。

第二部は、「通信技手の歩いた近代(評論社)の著者であり、会員でもある甲子園大学助教授松田裕之氏の研究発表である。タイトルは「通信技手の手記と米欧回覧実記に見るITの黎明―ライフヒストリーとナショナルヒストリーの交差」。かつて、山崎氏が土佐出身で電信技手だった祖父君の資料をなんとか出版したいと松田氏に手紙を出したことが、今回の出版に結実した経緯である。

使節団の派遣時は海底電線が着々と敷設されている時期であり、日本からの情報の確保に通信の恩恵を受けている。また、『実記』には電信会社、電信局、実験見学等が列挙され、使節団は軍事に於ける兵器としての重要性をロシア等で学習した模様である。数年後土族の反乱鎮圧に成果をあげ、前記の伝記につながる。

(文) 北村彰一

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

趣旨 この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えます。
この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。

会員 上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例会 年に4回くらい全体例会をもちます。

部会 テーマ別に読む会、歴史、現未来、総務部会等があり、映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙 年に4回程度機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役員 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会費 年会費5,000円とし、主として通信費及び機関紙に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には準会員(年会費3,000円)の特典もあります。

事務局 「イズミ・オフィス」に置きます。
〒192-0063 八王子市元横山町1-14-16
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:0426-46-3310
FAX:0426-45-8700

入会申込
入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。
00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会



.....ホームページのご案内.....

◇米欧亜回覧ニュース第1号からのバックナンバー など

* 皆様のご意見をお聞かせ下さい

<http://www.iwakura-mission.jp>

＜催し案内＞

2004年10月～11月の予定です

☆10月全体例会

日時：10月30日(土) 13:00～16:30
場所：プレスセンターホール(内幸町)
講演：保阪正康氏(ノンフィクション作家)
テーマ：中国からみた昭和という時代
会費：3000円

☆実記を読む会

日時：10月7日(木)、11月4日(木)
12月2日(木)、1月13日(木)
場所：南青山クラウンインターチェンジ内サロン
電話 03-5469-2090

☆英訳実記を読む会

日時：10月21日(木) 18:30～21:00
場所：国際文化会館 セミナー室A
会費：1000円(食事・飲物はできません)
世話人 岩崎洋三 zaa96087@oak.zero.ad.jp

☆歴史部会

日時：10月15日(金) 18:00～21:00
場所：国際文化会館
テーマ：私の伊藤博文論
報告者：石川直義氏(会員 日本郵船O.B.)
申込みは、小野博正または事務局まで

☆現未来部会

日時：11月26日(金) 18:30～21:00
場所：国際文化会館 Dルーム
テーマ：科学技術を巡る日本の国際対応
報告者：塚本弘氏(会員・ジェトロ副理事長)
会費：1000円(食事・飲物はできません)
*11月14～16日に京都で行われる、科学技術版のダボス会議を目指す「科学技術国際フォーラム」の準備から当日の結果まで、舞台裏の苦労話を含めて紹介。あわせて、日本のグローバル対応の問題点など。

☆関西支部例会

日時：10月14日(木) 12:00～17:00
場所：大阪凌霜クラブ会議室

編集後記

◇八月二十五日をもって、当会が特定非営利活動法人(NPO法人)となったのに伴い、今号から「米欧亜回覧ニュース」となりました。既に題字に「亜」が入っていたこともあり、表面上大きな変化は無いように見えますが、各紙面の背後から、新たな段階に踏み出す決意と熱い思いが伝わってきます。

◇新書版の「岩倉使節団」という冒険や「堂々たる日本人」の文庫化、来春に予定されている『実記』の現代語訳出版に映像のビデオ版など、手軽で質の高い、必携のテキストが出揃いつつあります。これらを若年層などへの働きかけに活用していくことが、NPO法人の目的の一つであり、会員の「特定非営利活動」の体現だと思えます。

◇日本の銅版技法は、天明三年(一七八三)司馬江漢を起源とし、最も活況を呈したのは、紙幣、切手などの需要が増大した明治前半期です。その証しが、明治十一年に刊本となった『実記』の大量の挿絵銅版画です。日本と米欧が交差する近代史の貴重な素材として『実記』自体に焦点をあてた久米美術館の特別展(十月三十一日まで)は、当館ならではの着眼です。